

## コンスタントのニューバビロン×建築界②

南後由和

Yoshikazu Nango

### 1 レム・コールハース来たる

一九六六年に、アムステルダムにあるコンスタントのスタジオを訪れたハーグポスト紙の記者とは、当時二二歳のレム・コールハースであった。取材のなかで「二、コールハースと同行の女性記者は、プロヴォの活動にニューバビロンが流用されていると感じないかという問いをまず投げかけた」。それに対して、コンスタントは次のように切り返した。「ニューバビロンは乗っ取ることではできません。というのも、皆のものだからです。それはもはや単に私の個人的な表現ではありませんよ。皆が利用可能な計画です」と。ニューバビロンは私的表現を超えた集約的作品としてあるというわけだ。

また、コールハースらは、ニューバビロンのすべての住民が「遊び」を欲しているのかとも問いかけた。たしかに、前期ニューバビロンにおいては、人びとの遊戯的な自発性に期待しすぎるあまり、日常生活の創造的解釈である創造的リテラシーが諸力によって重層的に編成されたものであるという認識を欠いており、日常実践の場を自立的なものとして捉えたいで既存の空間編成の組み替えを半ば強要するというイデオロギー性を帯びていた。そのことが、やがて後期ニューバビロンへの転回へとつながっていくがゆえに、コールハースらの問いは的を射た批判だと言えよう。

そうは言うものの、以上の応酬は、すでにコンスタントがシチュアシオニストインターナショナル(以下S↓)の機関誌や展覧会カタログなどで言及していた内容に関するものが多く

を占め、とくに目新しい知見ではない。むしろ興味深いのは、一方では、このインタヴュー自体が、七〇年代以降のコールハースの建築家としての活動をシチュアシオニストの実践と比較する際の史実および伏線として象徴的な意味を帯びている点にある<sup>1)</sup>。他方では、ニューバビロンにおける

政府のあり様をどのように思い描いているのかという質問に対する答えのなかで、「国家という観

念は、生存競争、ある集団と別の集団間の争い、財産権保護の産物にすぎません。世界経済が

発現するようになると、それは不可避免的に起こる」とで



Constant (left), de Jongh and 野村武吉 (right) at the studio in Amsterdam.

### 1 「ハーグポスト」

一九六六年八月六日号の記事、コンスタント(左)、コールハース(右)

しょうが、国家は自動的になくなるでしょう」と述べている箇所、またはインタヴュー終盤における「セクターのネットワークは、世界中に広がるでしょう。私は赤いシミのように地図上に記された円形の一種のノードとしての都市という概念を放棄したのです」などの発言箇所から、国家概念の変容に対する空間論的視座への接続、いわばコンスタントの関心が建築模型の内部空間のスタディにとどまらず、グローバルレベルでの都市の空間編成に移行していることが読み取れる点だ。

シチュアシオニストの地図制作とえば、ギードウポールを中心とする「心理地理学的パリ・ガイド」(一九五七)と「ネイキッド・シティ」(一九五七)がよく知られているが<sup>2)</sup>、コンスタントも六一年から、グローバル化する都市を照射する地図制作を、ニューバビロンのプロジェクトの一貫として開始している。

### 2 地図制作としてのニューバビロン

そこではまず、コンスタントの地図制作の展開を鑑みるう